

須藤克三作久米宏一

# 出かせぎ村のゾロ





**913／出かせぎ村のゾロ**

---

須藤克三（すとう・かつそう）

理論社／1968年初版

214p／23cm／菊判

■小学生文庫■

■■出かせぎ村のゾロ■■

■作者■

■■©須藤克三■■

■発行者■

■■小宮山量平■■

■発行所■

■■株式会社 理論社■■

■■東京都新宿区若松町104■■

■■電話（203）5791～5■■

■■振替東京95736■■

■発行■

■■1973年 8 月第10刷■■

はじめに

山の子どもは、山に生きる。

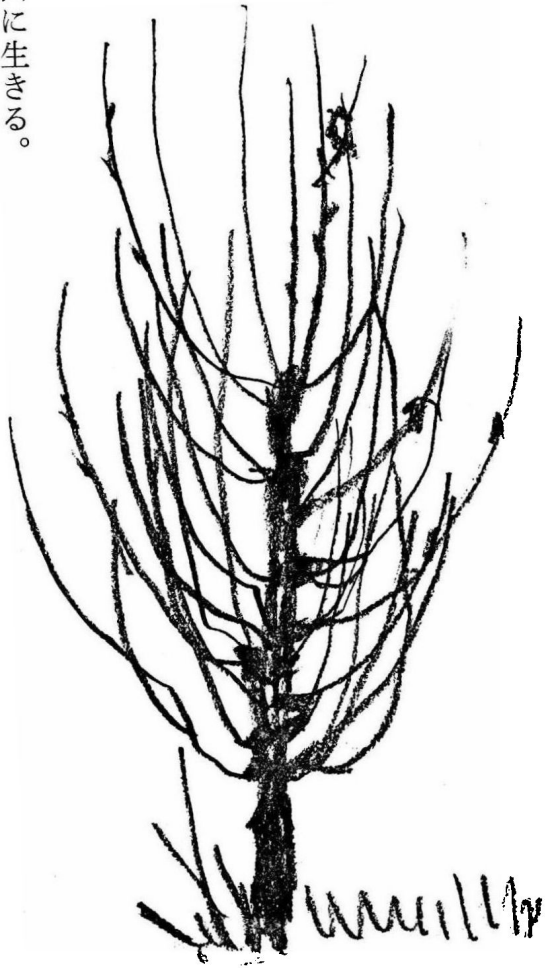
村の子どもは、村に生きる。

父や母が、出かせぎにいつても、こぶしをにぎり、

目を光らせて、うでをくむ。

そして、みんなの

悲しみを はねかえす。



怒りをぶちまける。

よろこびをとりもどす。

なんでえ、こんなあらし。

なんでえ、こんなふぶき。

つっぱしるんだ。

つっぱしるんだ。

山は生きてるんだ。

村は生きてるんだ。

おれたちも生きてるんだ。



# 出かせぎ村のゾロ

もくじ



|   |             |    |
|---|-------------|----|
|   | はじめに        | 1  |
| 1 | ヒゲのはえたモナ・リザ | 7  |
| 2 | 見ならいゾロ      | 21 |
| 3 | みずっぱなデモ     | 38 |
| 4 | おっかのラブ・レター  | 51 |
| 5 | てなもんやテレビ    | 61 |
| 6 | ばけの皮ミンク     | 72 |



|      |            |     |
|------|------------|-----|
| 7    | コイノボリ・カンパ  | 89  |
| 8    | キツネのついたシッポ | 102 |
| 9    | ヒミツはアナにうめろ | 114 |
| 10   | ムラハチブ      | 125 |
| 11   | 出かせぎジゾウ    | 146 |
| 12   | いもんシヨウ     | 172 |
| 13   | ユキオンナ      | 199 |
| あとがき |            | 214 |



そうてい／さしえ  
久米 宏 一



## 第1話

# ヒゲのはえた

# モナ・リザ



まだ雪ののこっている山から、太陽が出ているが、山すその道は、くつのあとや、足だのはの形のまんまかちかちにこおっている。

四月にはいったばかりの朝は、まだまだ春をこおらせていた。

ジロは、家を出る時から、なにもいわない。そのあとを、サブが、せなかをまるくして、歩いている。

——あんちゃ、なに考えて、こんなに早く、学校にいくんだべ。

サブは、ジロのせなかに、言葉をかけた。

「あんちゃ、おらあ、寒くて——」。

ジロは、ふりむきもしない。

「バッカヤロ、さっき、おつけを三ばいもくつたくせに。」

「おつけ三ばいと、寒いことと、カンケイない。寒いから寒いんだべ。」

サブは、口をとがらせていった。

「サブ、おまえ、ハンコウキだな。」

ジロは、どこでおぼえたのか、いやにむずかしいことをいって、にやりとした。

「なんだい、ハンコウキって。おれ、四年生になったことか。」

「そんなんじゃねえ。おとなが、かつてにおれたたちのことを、そういうんだい。そんなことどうでもいいから、さっさと歩け。」

ジロは、ハンコウキを、もっと聞かれるとうるさいから、いそぎ足にすることにした。

ジロだって、どこまで知っているか、あやしいもんだ。

「よー、ジロ。」

新しい自転車じてんしゃにのったベンが、ふたりを追いこして声をかけた。

「ジロ、ばかに早いじゃねえか。六年生になったから、ジカクして朝勉強あさべんきょうする気になったんか。」  
なんだって。——シンマイ中学生のくせに、いばってやがらあ。

「バツカヤロ。」

小さなこえでいったつもりだが、ベンにきこえたらしい。

ベンがふりかえった。

「ジロ、きょう、おめえのおとうとおっか、出かせぎから、かえってくるってな。それでおめえ、

うれしくって、早起きしたんだろ。」

ジロは、ヒミツをばらされたように、ドキンとした。

「ちがわい、ちがわい——」。

ジロは、どぎまぎして、どなった。

「ジロ、かくすな。おめえの顔にちゃんと書いてらあ。おっか、おっぱいちょうだいって——。おっかのおっぱい、おおうめえ——」。

ベンは、はやしたてて、自転車じてんしゃにスピードをかけた。

ピカピカのニュー自転車じてんしゃが、朝の光にキラツキラツと光る。

「バツカヤロ——」。

ジロは、思いきり大きなこえでどなった。

サブが目をくりくりさせていった。

「あんちゃ。おとうとおっか、出かせぎからかえってくるから、早く学校にきたんか。おらも、そうだと思ってた。」

「バツカヤロ、おとうなど、こないほうがうるさくなくていいんだ。いねえほうがよっぽど……。」

ジロは、みんなから、胸むねのなかを、すっかり見すかされたようで、くやしくなってきた。くやしいうんじゃねえや。はずかしいのかな。そんなことどうでもいいや。ちくしょう……。

ジロは、いきなりかけた。

が、いつのまにか、じくじくとけだしたどろ道に、ゴムぐつの足をとられ、思わずしりもちをついた。

「アウト。」

サブがいった。まったくうまくいった呼吸だ。こういうのをタイムリーとでもいうのかな。

「バックヤロ。」

ジロは、切りかえすようにいったが、こんどのバックヤロは、どうやらてれくさそうなバックヤロだ。

ジロは、道ばたの小川に、どろまみれになった両手をつっこんだ。

「うえっ、つめてえや。」

雪どけの川の水は、まるで、はもので切りつけるようにつめたい。

ジロは、思わず顔をしかめた。

銀色にふくらんだネコヤナギのかげが、雪どけ川に、ゆらゆらしていた。

\*

人っこひとりいない校庭に、校舎のかげが半分ほど、かぶさっていた。

「あんちゃ、出入口が、まだあいてないよ。」

「いいから、おれについてこい。」

ジロは、校舎のうらのほうをまわり、こわれかかった木戸を、ごとごとさせ、うまくはずした。

「うめえな。チビッコ・ギャングそっくりだ。」

「だまってる。」

ジロとサブは、ゴム長ながを両手にぶらさげ、足音あしおとをしのばせて、ジロの教室にはいった。だれもない、うす暗い教室というものは、まるでバケモノやしきみたいなものだ。六年生の教室にはいったサブは、めずらしそうに、あたりをきよろきよろみている。

ジロは、自分の机の上に、かばんをおろした。

サブが、小さな声でいった。

「あんちゃ、おとうとおっか、なん時ごろのバスでつくんや。」

「そんなこと、知るもんか。」

「十時ごろのバスじゃねえかって、じいとはあがいったよ。」

ジロは、だまってつつ立っている。なにか考えごとをしてるみたいだ。

「おっか、なに買かってくると思う。あんちゃはなに一番ほしい。」

「……………」

「おとう、ぜにどれくらいもってくると思う。」

「……………」

「コーウんキ買うぐらいもってくるといいな。」

サブがなにをいっても、ジロはだまりこくって、なにかを、じいっとみつめている。目玉めだまがさつ



ぱり動かない。

サブは、そつと、ジロを見あげた。

ジロは、いきなり、黒板こくばんの近くに、先生がは  
つていたヘモナ・リザアの絵えのそばに近よつた。

サブも、そのあとについていった。

「あんちゃ、この女の人だれや。きもちわるい  
顔かほしてるな。レ、オ、ナ、ル、ドつてこの女の  
名まえか。モ、ナ、リ、ザつて、何というイミ  
や。」

でも、ジロは、なにもいわない。モナ・リザ  
とにらめっこだ。

サブは、うすきみわるくなつてきた。

ジロが、小さいこえでいった。

「サブ。この女の顔、おっかににってるな。」

にてるといえば、どこかにてるみたいだが、  
おっかの顔は、もっとがんじょうな顔だ——と  
サブは思った。



「おっかと、にてるな、サブ。にてるな。」

ジロは、ひとりごとのようにいいながら、先生の机の上にあった、黒のマジックで、モナ・リザの顔に、うすくヒゲをつけた。

「あんちゃ、先生にしかられるよ。」

サブがびっくりして、ジロの手をつかんだ。

ジロは、マジックをもったまま、じいっとヒゲのはえたモナ・リザをみつめていた。

\*

ジロは、ろうかに立たされていた。

先生のだいすきなモナ・リザにヒゲをはやしたので、ばつをくっていた。

——教室が急に静かになったな。みんな計算問題をはじめたらしい。おらあ、算数なんてきらいだから、ろうかに立たされていたほうが、ラクチンだ——。

ジロは、ろうかのひさしから、ポツンポツン

とおちる雨<sup>あめ</sup>だれの音をきいていた。屋根<sup>やね</sup>に、しがみつくようにこおりついていて雪も、きようあたり、すっかり消えるだろうな。

おとうとおっかが、出かせぎからかえってくると、春になるんだ。ながい冬だったな。ハンパの男しゅうのめしを、ひと冬たいていたおっかの冬も、ながかったべな。

おっか。おらは、立たされることなど、なれているからヘイチャラだが、おっかのかえる日バツをくうのは、メイヨじゃねえな。でもよ、おっか。おらあ、おっかの顔<sup>かお</sup>のヒゲが、氣<sup>き</sup>にかかったんだ――。

ジロは、立たされるまでのことを思いかえした。

「六年生になっても、こういういたずらをしたジロに、みんなはどういうチュウコクをしたらよいか、考えをいいなさい。」

ロウケツ先生がいった。いつも、ロウケツぞめというハイカラなネクタイをしているからだ。ロウケツ先生は、絵<sup>え</sup>がとくいで、女みtainとこがあるから、けっしてぶんなぐらない。そこが、こちのつけめよ。

「あやまらせろ。」

「べんしようさせろ。」

がやがやいだした時、ノブがいった。

「先生、ジロがなしてモナ・リザにヒゲをかいいたか、わけがあると思います。そのわけをはっきり